

唐津藩の石炭御手山経営に関する若干の考察

長
野

暹

目 次

- 一 はじめに
- 二 御手山指定と村方の対応
- 三 御手山の整備
- 四 経営資金について
- 五 藩及び元方の益金について
- 六 拝借金の増加
- 七 むすびにかえて

一 はじめに

幕末期に石炭が蒸気船の燃料として重んじられるようになってから、炭鉱採掘熱は高まるが、採炭技術の限界も

あつて、比較的容易に採掘できる炭脈の地域が中心にならざるをえなかった。この立地条件上で着目されたのが肥前唐津地域であつた。敵木・相知などは炭層が地表近くにあり、採掘された石炭も川船を使い松浦川を下つて唐津灣に搬出することが可能だったために、幕末期には、この地域は採掘の度が高まり、諸藩も石炭に関心を寄せて石炭採掘を進め、久留米藩や薩摩藩などは、唐津炭田地域に採掘場を借用して石炭確保に力を入れた。¹⁾

本稿では、このような状況下における石炭採掘の問題を御手山制の側面から検討してみようと思う。御手山制は藩が鉾山を直接管理し、掛役や支配人を任命して運営するもので、経営形態としては藩営の様相を呈していた。石炭鉾山の場合は、一般的に採炭を請負わす請山制が多かつたことからすると、御手山制形態は特徴的であつた。運上銀徴収に主体をおいた請山制に比べて、経営に直接対応する形態をとるゆえに、その運営においては、有能な責任者を配置する必要があつた。また、経営資金においても、藩の出資が基本であつた。

石炭鉾山における御手山制の施行は、石炭需要の高まりにに応じて、藩がその利益を確保するために積極的に対応しようとしたことに由来したものであるが、従来、この問題についてはあまり説明されてこなかつた。

唐津地域における御手山制の経営的側面については、史料制約もあつて必ずしも明らかでない。敵木・相知地域が幕末期に石炭熱の高まりによつて活況を呈し、盛んに採掘が行われたことは、これまでの分析によつて窺うことが²⁾できるが、この場合も御手山制についての検討までは詳細にはなされていない。最近、御手山制に関する史料が見い出されたので、それを通じて、この問題を検討してみよう。³⁾この場合、次のことに主点を置いて考察してみよう。その一つは、御手山指定の経緯である。請山制と異なる側面が、これによつて検討できるであろう。二つは、経営主体についてである。藩営という形態をとつた場合、その経営の実態がどうあつたかを考察することは肝要なことであろう。三つは、経営資金に関すること、資金調達の説明は、経営実体を考察する場合に欠かせないことであろう。この他にも、労働力の調達や石炭採掘技術及び販売の問題などがあるだろうが、⁴⁾史料制約もある

ので、前記事項に限定して考察してみよう。御手山制がとられた相知地域は早くから石炭採掘が行われてきた所であるので、御手山制の特質を検討するには、それ以前の石炭経営との比較で考察することも肝要であるが、史料上から、この点での究明は現時点では限界が大きい。それゆえ、さしづめ前記課題について検討することにしよう。

- (1) 井手以誠『佐賀県石炭史』（金華堂、一九七二年）二九—三二頁。
- (2) 細川 章『肥前多久「御屋形日記」の中の石炭記事Ⅰ—Ⅴ』（『エネルギー史研究ノート』のち『エネルギー史研究』と改称、六〇—一一号、一九七六—八一年）、佐賀藩多久領内においては請山制が一般的であったことが窺われる。
- (3) 井手以誠、前掲書三〇頁、『相知町史』上巻（一九七七年）五七七—五八三頁参照。
- (4) 『相知町史』下巻、五五—五八三頁。
- (5) 『唐津藩石炭御手山文書』（仮題）（佐賀県東松浦郡相知町 向郁一氏蔵）。
- (6) 村串仁三郎『徳川期石炭業における技術・経営・賃労働』（『経済志林』五二巻一号、一九八五年）参照。
- (7) 坪内安衛『石炭史』（佐賀県鉱工課刊、一九八五年）参照。

二 御手山指定と村方の対応

肥前厳木・相知地域は地表に近い炭層があり、それが石炭需要の高まりによって、採炭を盛んならしめた。しかし、石炭採掘による被害も発生させた。悪水の田畑への流入、それに伴う作物不作などで採炭地域の住民は、炭山の開発には否定的であった。このような状況の中で、唐津藩が御手山指定を行ってきた。元治元年（一八六四）四月のことである。相知村の大庄屋と村役人に対して、次のように「申渡」を出している。

当状勢柄石炭必要之品ニ有之い処、深主意被為在、其村方和田与申場所此間御手山ニ被仰付い、尤田地障其外之儀者夫々手当方可申付い、此段申渡い

石炭が必要として、相知村和田を御手山にすると申し渡している。一方的な指定である。御手山制をとるに至った経緯は、この限りでは明らかでないが、石炭需要の高まりが要因であることは否めない。御手山指定においては、この史料においては「御手山ニ被仰付ひ」と一方的な措置となっている。それも石炭が時節柄必要であり、深き主意に基づくものであると言及しているだけである。藩領域内の鉱山所有は藩主に属し、それゆえに主意によつて御手山指定を行うことができるという認識である。藩主の排他的な領有制が前提とされている。しかし、これも御手山に指定される地域住民への影響を無視しえない段階にあることは「田地障其外之儀者夫々手当方可申付ひ」とあるように、田地などに支障を生じる場合は手当するとしていることに反映している。住民の意向を考慮せざるをえないことが示されているが、これは石炭鉱山において鉱害問題で多くの紛議をかもしてきたことに由来する側面もあった。²³御手山指定のみによつて、簡単に鉱山経営に着手することが可能とはみておらず、指定地域住民の同意を必要とするという認識の下に対応が進められているのは、指定地の田地に支障が生じた場合は補償するとしていることから明らかである。これなしには農民の納得をえられなかったことの反映であろう。ところで、御手山指定を行う通知をしたが、一片の通達のみで対処できるとはみていない。つまり、村方の納得を必要とする認識があるからで、そのための措置として、大庄屋・庄屋に村方への説得を命じている。ここでは村役人層が藩の行政的運営の一端を担当させられている。村請制村落における特質がここにみられよう。藩役人でなく大庄屋と庄屋に説得を担当させることは、村方の反応を無視しえない段階にあつたことを示すものであろう。

それについては、

只今被申渡ひ通石炭必要之時節ニ付、深御主意被為在、御手山被仰出ひ事ニ而是迄之通御益一向之事ニ無之重御事柄ニ付、其段得与相弁小前之者毎万一心得違等無之様可申論、勿論田地障等之儀者夫々御手当被下置ひ事ニ而追々出石いたしひ上者、村方為助ニも相成ひ者申迄茂無之儀、其辺も得与可申聞ひ

とあり、村方小前の者に説得することを求めている。御手山指定に伴うその実際的な措置は大庄屋・村役人層の任務とされており、村請制の機能が活用されている。しかし、ここでも採掘に伴う田地の被害などが問題であることが出ている。

大庄屋・村役人層に小前層への説得を命じているが、村請制村落において、行政的側面の活用がここにもみられる。小前層の説得が大庄屋や村役人の任務であるという認識においての対応である。このために、大庄屋や村役人は御手山受け入れを村民に求めざるをえなくなるが、一方的に押し付けることはできなかった。村民の日常的在り方に深く係わっているだけに、実状を無視した措置はとれないでいる。御手山指定と共に、その運営に必要な手立を講じようとしている。村方から御手山の掛役と支配人を取り立てることが行われている。藩士では石炭採掘などの業務担当は無理であり、それゆえに村方の者に対して掛役や支配人を任命しようとしたのは、村方の機能を活用することが目指されたとみれる。採炭や運搬に必要な労働力の調達などでは、御手山指定地域の有力者の活用が目論まれているのは、掛役に庄屋、支配人に村有力者を任命していることにそれがみられる。

梶山村庄屋を兼ねている黒岩村の庄屋向郁治に掛役を、相知村の向定吉を支配人に指名している。

申渡

梶山村兼帯
黒岩村庄屋
向

郁治

此度深御主意被為在相知村和田^①与申場所御手石炭山被仰付^②間、依之其方^③江掛り役者仰付^④、格別致心配御為筋相励可申^⑤、此段申渡^⑥い

と向郁治に申し渡している。定吉^⑦にも同じような「申渡」がなされており、御手山指定が進められている。藩が御手山指定をしても、村民は容易には納得していない。四月十一日に相知村大庄屋田崎九郎^⑧は次のように書状を地方

役所に出している。

此節御沙汰ニ相成井石炭御手山之儀、村方并定吉江申談示ハ御處、未タ納得仕兼申ハニ付、此上積ニ申論納得仕ハ上、罷出御届可申上奉存ハ御處、明日椿植付御見分御役ニ様御入込ニ相成申ニ付、右用向相兼ハ上罷出ハ様可仕、今日之御日延奉願ハ、此段以書付申上ハ以上

子四月十一日

相知村大庄屋

田崎九郎

地方

御役所

村方と掛り役を申付けられた定吉は承知しておらず、藩が「深御主意被為在」ということだけで、一方的に御手山指定を行ったことに賛同していない。

村民が石炭採掘を拒否しているのは、二十数年前に採掘が行われ、その折に悪水が田地に流入してかなりの被害が出たことに起因している。² 鉾害を問題にしている。それについては、大庄屋田崎九郎は次のような要望書を出している。

(四月十一日)

去ル十一日御沙汰御座ハ当村和多石炭御手山之義、村役始小前一同呼出委細御達書之趣申諭ハ御處、右場所之儀者先年少ニ出石仕ハ御處、外場所とハ違殊之外悪水ニ而御用地皆無ニ罷在、既ニ貳拾年余茂荒ハ程ニ而以來石炭山之儀不相成事ニ御定仕居ハ御處、其後度ニ元方共ニ相談仕莫大之弁金等差出度旨申出ハ得共、永久御田地ニ障ハ而者百姓多人数及漬ハ儀ニ付、一切相断居ハ儀ニ付如何様御勘弁被下置ハ様一同歎出申ハ御處、当節之儀者御上深き御主意ニ而被仰付ハ儀ニ付、下方難儀之儀夫ニ御手当茂被下置、小前為筋ニ茂相成ハ様被思召ハ御事ニ付、御恩沢之儀深奉恐察、如何様御受申上ハ様再三申談示ハ御處、御主意ニ御違背申上ハ而者相済不申義ニ得共、何かと御受者可申ハ得共和

だと申し、而者手広き場所ニ而、此節一円ニ被仰付義と茂不奉存存付、場所御定之上模寄御田地障等御見積之上、御手当方等茂夫々御取極不被申置而者前広御受申上儀何分難儀千萬奉存存一段一向申出存付、右之当御汲沢被下置、此節竹取掛之場所御定之上、御田地障等被仰付被下置儀奉願、此段以書取申上存以上

子四月

相知村大庄屋

田崎九郎

とある。御手山指定についての村方の対応であるが、相知村和多に定めたことに関して意見を出している。二十数年以前に同地域では石炭採掘が行われ、その折に悪水によって田地は収穫が皆無になり、それ以来放置されてきたことを指摘している。⁵⁾石炭採掘について度々相談があったが一切断ってきたと過去の経緯を記している。御手山に指定した所が以前に石炭採掘が行われた所であり、稼業中止後も相談があったことからして、石炭山としては有望視されていた所であつたとみれる。補償金を出すという採掘希望者の申し出を断つた経緯を述べ、藩からの御手山指定については、条件として広域指定でなく一定場所に限定することを求めている。

村民が簡単に納得したとはみれないが、大庄屋や藩役人の説得があつたともみなされる。御手山の範囲検分のために四月十七日に掛役が派遣されることになった。ところで、村民が石炭採掘に難渋を示しているのは、過去に採掘された折に、約束通りに田地潰れや悪水に対する弁償が行われなかったことも大きな要因であつた。相知村名頭与十郎・武右衛門と大庄屋田崎九郎の「申上口上覧」の中で

都合千三百俵内外冬三百俵、辰冬五百俵、巳冬五百俵御渡被下置御約定ニ而、其外潰地悪水障夫々御見立之上、御手当被下置一同納得仕存處、潰地代弁米等之儀者夫々御渡済ニ相成存得共、右千三百俵之内、貳百俵代辰六月迄三度ニ御渡、同月存生石百斤ニ付七文宛御渡之御再談ニ相成、其後者炭出方茂相減存ハニ錢拾四貫九百五拾貳匁九分六厘御渡ニ相成存ハ而御約定向取崩れ小前一同難儀千万奉存存

と約定通りに補償の米と銭が支給されなかつたことを指摘している。米千三百俵のうち、渡されたのは六百俵であり、石炭百斤に銭七文支給という改訂条件においても、銭一四貫余が出されただけであるとしている。このようなことが村民として石炭採掘に難渋を示す要因になっている。今度の御手山の指定に対しては、

御主意を以御手山被仰出ハニ就而者外方仕組等与者違、御違背申上ハ儀ニ者無御座ハ得共、前条申上ハ通、惣田畠ニ悪水溢れ地味劣ニ相成、数年難渋仕ハ儀者眼前例ハ茂御座ハ儀ニ付、其御含ニ而御慈悲之御沙汰不被成下置ハ而者何分一同服し兼ハ向歎出申ハニ付、別段之御憐愍以小前一同安心仕ハ儀御慈悲之御沙汰被成下置ハ儀様奉歎願ハ、此段以書取申上ハ以上

とある。これは相知村名頭の与十郎と武右衛門及び大庄屋田崎九郎が認めたものである。御手山に指定されたので、その達に背くことはしないが、悪水が溢れ、田地が荒れることは明白なので、それを理解した対策を講じてほしいとしている。御手山指定を簡単に引き受けたものでないことの一端が示めされている。

村民はかつての石炭採掘による被害によつて、採掘を好んでおらず、補償の金米は一時浚ぎであり、田地は永代にわたるものという観点が形成されている。四月十八日に「以書付御受申上ハ夏」として、書状に次のように認めている。

当御時勢柄石炭必用之品ニ付、深御主意被為在、当村字小黒み江此度御手山被仰付ハ処、御田地障其外之義者夫々御手当方被仰付ハニ付、右之次第小前一同江申諭ハ様御沙汰之趣奉畏、委細申諭ハ処、小前ニ而茂往々難渋ニ不相成様御田地障其外夫々取調之上、御願申上ハ通被仰付被下置ハハ、聊御違背申上ハ義無御座段申出ハ、然ル上者追々私共ニ而取調之上御願申上ハ様可仕ハ、此段私共御受申上ハ

子四月十八日

相知村惣代

甚五郎

喜平治
久作

大河内 禎助

同村名頭

与十郎

武右衛門

同村大庄屋

田崎九郎

地方

御役所

とあり、石炭採掘で影響を受ける田地の調査と補償を前提として御手山指定を受け入れている。大庄屋や庄屋層の強い働きかけがあつたものとみれる。村民は鉾害に対する補償を確認させているが、それは過去の被害に対する償りがこめられたものであると受けとれよう。

村民が石炭採掘を拒否しているのは、二十数年以前に採掘が行われ、その折に悪水流出などで田地に被害が出たことに起因しているが、これが問題になっている。それは四月十八日に次のような要望を出していることから窺われる。相知村惣代、同村名頭、同村大庄屋が連名で次のような書状を提出している。

一 潰地之分御買上可被下置い

一 納屋下田畑仕付通弁米御付可被下置い

一 道下溝并堤下ニ相成い分田壺升、畑八合之割を以弁米御付可被下置い

一 古川悪水障之分御見分之上、仕付余米之分御手当可被下置い

一 下田原之内、下露り菅田横道下迄悪水障御見込として石炭百斤ニ付五文宛御手当可被下置い

一土場料式文

一土場番料式文

一山地賃文

右之通夫、御手当被下置様奉願い 以上

子四月十八日

地方

相知村大庄屋

田崎九郎

御役所

右の要望事項に対して、藩側は十分な対応をしていない。「小前談示之上条書ヲ以夫、御願申上り処、左之ケ条御聞濟無御座」とある。大庄屋に対しては「小前江得与申論様被仰付」と小前への説得が強いられている。小前層への説得は行われたようで「小前一同呼立」とある。これに対して小前層は再度要望を出している。

その一つは潰地の取り扱いに関するものである。

御役所ニ而御買上与申義者不相成、障り分年、仕付米御手当被下置、出石止り上者元地ニ相成様御普請之上御渡ニ相成様御沙汰之向地主江申渡り

と田地の買いあげはしないが、被害のできた所には仕付米を出し、採掘を止めた折には、田地を元のようにして返すとしている。採炭に伴う田地のことが問題になっており、過去のことから、複雑な問題があることが出ている。小前層の反応は、藩側の申し出について消極的である。

莫太の糟石曳出相嵩ミ得者地底迄悪水染込、其上右莫太之糟石運り先無御座、長、潰地ニ可相成奉存り得者、其処御汲沢被下置一升時三百匁之刻を以御買上被下置様奉願い

と採炭によって多量の岩石が搬出され、そのために田地は潰地になるので、田地を買いあげるようにと要求してい

る。過去の採掘による被害が大きかったことが窺える。

次の問題は悪水による被害に関するもので、藩側は「古川悪水障之分御見分之上、仕付余米分御手当可被下置^ハ」
としていたのに対して、村民は、

此段御聞届^ニ茂可相成^ハ外^ハ処、石百斤^ニ付五文宛御積立下置^ハ得^者、天々之積立手当致可然御沙汰^ニ御座^ハ、古川
横道下之分^者悪水溝用水溝両様御手当被下、悪水不相障との思召之向^ニ御座^ハ外^ハ処、少々之増水^ニ而も雨水相混御田
地障^ニ相成可申懸念仕^ハ、^ニ付而^者差障^リハ節^者御見分之上、願之通御手当被下置^ハ様奉願^ハ

とあるように、悪水流出の折は、「石百斤^ニ付五文宛」支出するとしたのに対して、古川横道下の分は少々雨でも
田地に支障が出るので、この分についても手当してほしいと要望している。このように悪水問題が大きな課題にな
っている。

次は村益錢に関するもので、石炭百斤につき五文出すことを要望していた。大庄屋は藩側の意向をうけて交渉し
たが、村民は「村益之義^者三文^ニ而も致方有御座間敷段押々納得仕^ハ」と三文宛の補償で納得している。

四月二十一日に大庄屋と組頭が村民を説得し、補償問題について一応の見通しがついている。二十三日には
石炭御手山の検分として十一名が、「右五ツ時頃御入込、八ツ時頃御出立也」と出向いた。

検分の結果、藩は採掘に伴う被害補償として八項目にわたる申し出をした。

一 漬地之分仕付米手当遣取済之上、元之地味^ニ致、普請を可申、尤地味格別相劣^ハ、其節手当方遣可有之事
一 田地障として百斤^ニ付五文手当遣^ハ間、古川其外障^リ之模様^ニ寄割賦可致、尤格別補^ハ節^者別段手当方^茂可有之
支

一村益百斤^ニ付壹文手当遣可申、尤迫而差明之品も可有之支

一 水溝下田壹升畑八合之割を以手当可遣事

一土場式文

一同世話料式文

一地賃書文

一役料之儀者追而可及沙汰ニ事

右之通申付以上

子四月

地方役所

とある。潰地の補償、村益金、土場料、世話料のことなどが定められている。これに対して、相知村百姓惣代の常助、善兵衛、同村惣代の甚五郎、喜平治、久作、同村名頭の与十郎、武右衛門、同村大庄屋田崎九郎が連名で「御見分之上、夫々御手当等之外置有段被仰渡難在右奉畏有、依之御請一札如件」と請書を四月二十二日に提出した。これによつて、御手山指定に伴う村方との交渉は一段落した。

石炭採掘によつて可成りの被害が出ていたことが、以上の経過から窺える。村民は田地が潰れ、作物に被害が出るので、採掘を余り好んでいない。結局は藩の御手山指定を受け入れさせられている。ここに藩権力の重みを見出すことができるが、しかし、藩側が潰地や悪水に対する補償を約定せざるをえないことは、藩権力による一方的断行という措置がとれない状況を反映しているものと受けとれよう。約定においては、村方への補償事項について潰地、田地障、水溝下地の補償と土場料、世話料、役料の支出を明確に定めざるをえないことは、村方の納得をえるためには、これらの補償が必要であつたことを示すものであり、それだけに、村方の動向を考慮せざるをえなかつたとみれる。土地に対する藩主の領有権は、それが用益権との関係では排他的でなく制約されることを反映しており、それは領主権と村との関係において、領主権が限界性を持たざるをえない段階にあることが、鉾山運営においてはみれたということを意味しよう。幕末期における御手山制は、このように村方の動向を反映した上で

施行されており、そこにこの期の特徴をみることであり、藩営ということにおける制約を指摘しよう。

- (1) 坪内安衛『佐賀県石炭史』(佐賀県鉱工課刊、一九八五年)。
- (2) 幕末期肥前地域の石炭鉱山による鉱害問題については、拙稿「幕末期肥前地域における石炭産業に関する一考察」(『エネルギー史研究』十一号、一九八五年)。
- (3) 向家が黒岩村の庄屋となるのは文政十一年(一八二八)であり、慶応三年(一八六七)まで向家が同村の庄屋職を勤める。『相知町史』(一九七一年)年表五七―六一頁参照。
- (4) 父向治八の代から石炭業を発売に行い、定吉はそれを更に発展させ、御手山支配人としての功績により、明治元年(一八六八)には大庄屋並待遇を許可されている。前掲町史、年表六三頁。
- (5) 田崎九郎は安政五年(一八五八)に相知組大庄屋代役となり、文久元年に同組大庄屋であつた田崎權十郎が鏡大庄屋となつたことにより、相知組大庄屋となる。前掲町史、年表六〇頁。
- (6) 弘化元年(一八四四)には石炭山道下潰れが起こり、梶山村に地弁米を納めており、鉱害は多く発生している。前掲町史、年表五九頁。

三 御手山の整備

村方が請札を提出したことによって、石炭採掘への動きが始まった。掛り役に指定された黒岩村庄屋の向郁治は、石炭百斤に係わる採掘費用の見積を提出した。この内容は表1のようである。¹⁾石炭百斤につき二〇七文要するが、内訳では掘賃が一六〇文で、経費の八〇%がこれに要する内容である。²⁾水引に二文しか掛からないとしているので、排水はそれほど大きな対処事項でなかったとみれる。また、棟梁に二文とある。棟梁制が施かれ、労働力調達や運用は、棟梁の下に行われる形態にあることが窺われる。勘場が四文とあり、石炭計算なども重き業務になっている。

表 1 石炭採掘経費
(百斤ニ付)

内 訳	経 費
掘 質	100文
水 引	2
棟 梁	2
勘 場	4
柱 木	10
仕 操	4
土 場	2
世話料	2
地 質	1
駄 賃	20
計	207文

う。出炭経費の八〇%が掘賃であることは、手労働が中軸であつた技術水準を反映しており、ここに炭層の位置が比較的表土に近い所に採炭が限界づけられることが現われている。

御手山指定も、このような立地条件に対応してなされたものである。

向郁治は作業場の見積もしているが、納屋十軒、茅疊六十枚、鍋二十、勘場納屋一軒、疊十八枚、鉄五束、油一丁となつており、これらは「右之通諸入用之内差掛御願申上り分書上申上」とあるように、藩に調達を求めている。御手山が藩営という形態であるために、石炭産出に要する諸物品の調達は藩が行うというのが前提とされている。それゆえに、御手山制は諸支出を補填し、しかも利益がもたらされることが必要とされる。ここに大きな課題があつた。

採掘に伴う影響が問題であつたことから、悪水による被害発生予想地の調査が行われた。「悪水障田見積畝書上帳」が、それによつて作成されている。同帳は

一田三升時

重蔵

一同壺斗三升時

友吉

一同壺斗時

森助

仕繰も同じく四文であり、労働過程の分業化が進展している形態にある。柱木、土場というのも、その作業分化の現れを示すものである。土場に二文、世話料に二文、地賃に一文とあるのは、さきの村民との補償問題に関する約定に基づく支出である。採掘に必要な経費からすると、補償費はそれほど大きな比率を占めない。補償がなされるとしても、それは十分なものでないことを示すものである。

などと書かれており、「下霸方菅田横道下」とある区域で十六人、「上古川横道上」で十三人、「下古川横道下」で二十六人の保有田が悪水障田として書きあげられている。その総計は一石一斗七升蒔となっている。

一方、土場に関する調査も行われて「石炭御手山御田地并土場手入調帳」が作成されている。

一田五畝拾八歩 但長拾貳間 横拾四間 善兵衛

一同式畝 但長四間 横拾五間 源六郎

一同三畝七歩半 但長六間半 横拾五間 新四郎

と書き上げられ、土場や納屋、溝堀土手などに要する土地調査が書き上げられている。

御手山経営で四月二十七日に向郁治は鉄五束の借用を申し出ている。また「下古川荷ひ下ヶ之分」として田一畝十一歩の上土さらえに五一人を要するとしている。

このように御手山の開墾を進めるに当っては、諸費用や用地補償が必要とされているが、その費用の借用を四月二十七日に向郁治は願ひ出ている。その内容をまとめれば、表2のようであり、かなり詳細なものとなっているのが窺える。

米五十俵、油、味噌、醤油、肴などの日用品と共に、掘子賃の前渡分まで要望している。採炭に伴う費用は藩側に貸与を求めるという内容になっている。経営の請負という形態でなく、掛り役に任命されたことにより、経営資金は藩の賄いによるとする姿勢が窺える。御手山制が持つ形態の一端がここに示されている。前の諸品と共に鉄五束代七二銭で一貫二五〇匁を貸し渡すように要望しているが、これらは四月二十七日に渡されている。これについては次のように記されている。

右両様共四月二十七日御願申上外、御通ニ付御渡ニ相成外、金_者菅氏方受取直ニ定吉江相渡、鉄_者材木町ニ而定吉罷出御渡ニ相成外

これによって、米、味噌などの諸物品と鉄が調達されたことが窺える。これらによって採掘準備の体制が整えられ、藩は掛役を派遣して監督としている。

四月二十八日から出役体制が表3のようにとられており、掛役は二人を一組とし、ほぼ半月勤務になっている。経営請負いによる運上銀上納の形態と異なり、御手山制は藩掛役の監督下で進められることが表われている。

表3 藩掛役出役日程

掛 役		出 役 日 数
小 田 周 助	}	4 月29日より出役
菅 辰治郎		5 月14日まで
杉山 甚左衛門	}	5 月14日より 5 月
宮 本 郡 蔵		29日まで
秋 山 奥 吉	}	5 月29日より 6 月
高 山 彦 松		14日まで
西 村 東 吾	}	6 月14日交代
高 山 彦 松		

表2 諸経費内訳

内 訳			費 用
米	50	俵	3貫 匁
油	1	丁	560
味噌	1	丁	170
醬油	10	丁	170
酒		代	1 500
肴		代	1 500
山		代	1 500
納屋	6	軒	1 995
掘子	8人	召抱前渡分	1 425
節句	入用	掘子渡分	1 425
諸	入	用	1 255
計			14貫500匁

御手山制は藩掛役の監督下で進められることが表われている。藩による必要経費の貸与ということが、管理体制を設ける必要を生じせしめているとみられる。

形態としては藩営という体制にあり、これがために藩掛役の出勤の体制がとられていて、請山制下における形態とは異なっている。管理の主体は藩であるという体制が施行されており、御手山制の特質がここに出ている。石炭需要の高まりが、このような形態をとるようになった要因であるが、それは石炭分野においては新しい形態であった。藩経営であるために、資金などは藩が提供している。採炭に必要な外的設備の整備が行われ、いよいよ採掘が本格的になった。

表4 石炭置場、搬送道などの諸経費

費用内訳	額
古川荷ひ下ヶ分	357 ^匁 分
炭置場拵	332
溝掘土手拵	960
石持出賃内渡	100
道土場拵	350 5
	156
計	2貫255匁5分

炭置場・溝・道などの工事が進められ、六月十三日には、表4のように、これらの作業を請負った長十郎に錢二貫二五匁五分が渡されている。このように、採掘に必要な設備の準備が進められているが、賃金のことなどで問題が起っている。六月十八日に向郁治は、次のような歎願書を地方役所に出している。

相知村御手石炭山下駄賃之義、百斤ニ付十五文宛ニ御定之向ニ御座^レ処、当年夏より打續之雨天ニ而田畑手入方殊之外手遅^レニ相成、何分時之下し方行届不申、難渋仕^レニ付、作後^レ六月十二日迄之処式文宛御増方被仰付、都合拾七文ニ而下^ニ様御願申置^レ処、作後尚又雨天ニ而田畑手入^茂相成不申、同日迄^者炭下^茂相成兼、漸其砌^方下方ニ相成申^レ処、前段申上^レ通田畑草拔一度ニ相成、下し方罷

出兼難渋千万奉存ニ付(中略)以御勘弁式文増ニ被仰付被下置^レ様奉歎願^レ、此段一同歎出申付、私^方以書付奉願上^レ以上

子六月十八日

掛り

向 郁治

石炭下駄賃が百斤につき十五文の定であるのを、雨天續きで田畑の手入れができずにより、一度に手入をしなればならず、そのために石炭搬出は出来かねるので、二文増しにすることを求めている。石炭搬出を村民の労力によつて行わせていることが窺える。村民は御手山制によつて労力提供を求められている。無償労働でないとしても、それは農作業などにも影響したので、村民にとつては色々と負担の増加をきたしたとみられる。これは運搬労働などの労働力は村民によつて確保されていることを示しており、御手山制による労働力調達の一面がここに出ているといえよう。夫役としての性格を帯びざるをえない形態にあり、御手山制は村民にとって好ましいものではなかったとみれる。

(1) 「唐津藩石炭御手山文書」(仮題)より作成、なお、以下の表も同文書によって表式化したものである。

(2) 表1にあるような諸費目は石炭価格算定に使われていたようである。『相知町史』下巻五五九―六〇頁参照。

四 経営資金について

石炭経営では資金調達が肝要になるが、それは藩からの借入金によって賄う体制がとられている。

覚

一七二錢拾貫五百目

御手石炭山

右者盆前掘子貸付諸手当入用并追々納屋立其外諸入用当拝借被相付被下置様奉願い

此段以書付奉願い 以上

子七月五日

懸り

向 郁治

地方

御役所

とあり、七二錢で一〇貫五百目の借用を願っている。費用の内訳は掘子貸付金、納屋建費用などとしている。経営資金は藩からの借用にも依存していることが窺える。これは経営資金は藩の拠出に依存していることを示すものである。借用の形態をとっているが、支出内容からして、資金は藩が出すのが前提となっている。これまでの御手山石炭採掘に伴う諸事項を整理して八月二十四日に石炭山支配人の定吉が書状を出している。それは以下のようである。

御手山石炭之儀、支配人^私定吉引請ニ被仰付、諸手当方拝借錢之儀追々出石代之内ニ別紙勘定書之通返上納可仕^い

一是迄段、御願申上納屋下始漬地之分附米之儀^者年々御上^り御手当被下置、右場所掘リ済跡地御普請之儀^茂同様御手当被下置^い、尤為御見込別紙勘定書之通相納度、若行届不申節^者別段上納可仕^い

一石炭直段之儀^者時々相場を以御取極之上御益^并御見込之分共二月御勘定残之分問屋^江願掛リ庄屋^江願御誘被下置^い様奉願^い

一右様諸事引請ニ付仰付^い上^者、別段拝借御願申上^い儀^ニ茂無御座可成月々炭代御渡金ヲ以取計、不行届分^者私引請^ニ而分配可被奉存^い得^者、向々極々指支^い節^者掛庄屋ヲ以別段御願可申上、右返上納之儀^者翌月炭代^ニ而御引含奉願^い、石炭是迄之処仕繰旁掘子増方^茂相成不申^い処、此節立壺出来之上^者水方之者掘子共を大勢呼入、九月中^者御見込通^り莫大出石可仕奉存^い処、追々冬向^ニ茂相成、元船払底等^ニ相成^い而^者余計之石炭置場土場等迄指支下様相成、自然石品悪相成、第一御不益分^者元方^ニ而^茂取続方不行届様罷成甚恐入^いニ付、直段之儀格別高直^ニ不仕、段々相好^い様仕^いハ、滯石無之様可罷成、賣捌方之儀^者問屋^ニ而^精心配仕、別^而上荷船無絶間登^い様増方被仰付度奉願^い、尤出石之儀^者可成大塊勝^ニ付中石迄下^い様、欠粉多分不相成様精々定吉^ニ而^見届丹精可仕^い一定吉儀一刻^茂早く勘場納屋出来自分引移不申^い而^者掘子見^予茂行届不申、金銭等借請又^者勘定滞出来猥^ニ逃去^りい^者も多分有之^いニ付、迎日中山方^江引移追々掘子相増^い様^ニ御座^い、尤此節掘子負抱えため、附々^江手配仕置^い

右之通御勘弁ヲ以私^ニ而^引請心付^い様被仰付被下置^いハ、難有仕合^ニ奉存^い、左御座^いハ、出石方丹精仕、尚又仕操水引等先^ニ至手数相成^いハ、此上御益相増上納可仕奉存^い、此段奉願^い 以上

子八月廿四日

ここで書き上げられていることから、当時の石炭経営上の様相が窺える。

拝借金の返納は出炭代金の中から支払うとしており、拝借金によつて経営資金が賄われている様子が出てくる。次に、採炭に伴う潰地の補償については、その手当を藩がすることを求めている。御手山ということから、補償問題は藩の責任という視点で捉えられているといえよう。石炭値段については、「時々相場を以御極」とあるように、藩が定めることを要望している。益金の見通しがつくためであろうが、値段問題が重要な要素であるだけに、このような要望がなされているとみれよう。これらの要望が認められれば拝借金を願ひ出ないとする。これは他面からみれば拝借金の要望が多かつたことを示すものである。この書き上げの中で、経営上の事項についてふれている。仕繰や掘子の増員が現状では出来ないとしているが、水汲み上げの体制が出来れば、水方や掘子の者を大勢呼び入れ、多量の出炭が可能になると述べている。²⁾一方、販賣面にもふれているが、問屋に販賣は委ねるとしているけれど「格別高値ニ不仕、段々相好い様仕ハ」と販賣価格が高値にならないことを求めている。問屋を通じて販賣するとしても、石炭価格は藩が定めるとしている点は、価格設定が問屋や上荷船の側でなく藩にあることを示している。御手山制の特徴をここに見出すことがきよう。

支配人定吉の要望書より、経営に伴う状況が窺えるが、拝借金の役割が大きく、また、石炭価格の藩側の設定などの特徴が出ている。

ところで、九月二十八日に拝借金を石炭代金で返済した書状があるので、これを検討しておこう。

一七二錢四拾壹貫三百八拾八匁

内

千百貫四百三十九文

八月中迄炭代二而
返上納い分

此七十二錢拾五貫貳百八十三匁八分七リ 残貳拾六貫四百壹分三リ

右之通御手石炭山諸仕入金之内、八月分出石代を以相納い、残之分拝借仕い処相違無御座い、然い上者 右返上納之儀先達而 御定之通当九月と追々 出石代之内、上石百斤ニ付六十文、切込石百斤ニ付四十文宛石錢高相添い上御取納可被下置い為後日差上申一札如件

元治元年

子九月廿八日

地方

御役所

これよりすると、七十二錢で四一貫三八八匁を借用していたが、八月中の出炭代金として七十二錢で一五貫二八三匁を返納していることが窺われる。この書状には山支配人、問屋、懸役、大庄屋が名を連ねている。拝借金に対して共同で責任を負う形態にある。これは拝借金が御手山の運営にとつて重きをなしていたことを示すものである。経営資金は藩からの借用という形態がとられている。これからすると、経営の主体は支配人向定吉にあり、藩は経営の内容まで立入った形態にない。経営の責任は支配人が負い、藩は資金を出す、これも貸付金という形態で提供される。この形態からすると、御手山制によって利益をえようとする藩側の意向は、どのようにして実現され

相知村蒔口
御手石炭山支配人

問屋 定 吉

同 松本源助

懸り役 吉井定治

向 郁治

相知村大庄屋

田崎九郎

るのかという問題が出てこよう。

(1) 問屋の松本源助と吉井定治は、唐津水主町の石炭問屋で、相知地域で産出される石炭はこの二問屋が扱っていた。〔相知町史〕下巻五六六頁。

(2) 水汲み揚げ賃が岩屋石炭御手山では石炭百斤につき二〇文である。一方、相知村の他の石炭山では三文とある〔相知町史〕下巻五五九頁。それゆえに岩屋石炭御手山は出水が多かったとみれ、水汲み揚げが出炭にとって肝要であった。

五 藩及び元方の益金について

唐津藩は御手山経営によつて収益を高めることを目論むが、収益形成の在り方の考察が肝要であるので、この点について検討しておこう。御手山制であるために、元方の経営資金は藩が支出するのが基本であるが、元方は拝借金という形態で資金供給を受けている。拝借金であるために返納が前提である。このような状況においての藩益金は石炭価格の面で措置されている。

石炭百斤に要する諸費用は表5のように計算されている。上石炭百斤の代銀は四〇〇文であるとして、百斤産出に要する費用の内訳を記しているが、掘賃に一六〇文、水汲み夫に二〇文、棟梁に二文などと採炭・搬出など直接生産に掛わる費用が二六三文とし、これらの費用を算出し、次いで百斤についての価格からそれを差し引いた額一七文を出し、それから、問屋の支払いが八文、石炭積出港土場料が二文、大庄屋へ二文、懸り庄屋に二文など問屋や庄屋の手当金など間接経費が四三文要するとして、これら諸経費を除いた残銭七四文が益金としている。これが藩の利益金となる部分である。中石炭も同様に計算されており、中石炭百斤に対する益金は三四文となっている。上石炭では一八%、中石炭で一四%の利益となっている。御手山制を施して藩がえる利益は石炭価格の一四%

唐津藩の石炭御手山経営に関する若干の考察

表 5 石炭価格内訳 (100斤につき)

	上石炭100斤 代銭400文	中石炭100斤 代銭240文
内	100斤につき 文	100斤につき 文
掘 質 (益 共)	160	72
水 引	20	20
棟 梁	2	2
勘 場	4	3
柱 木	6	6
仕 操	20	20
土 場 料	2	2
世 話 料	2	2
地 し 質	1	1
下 地 質	15	15
田 障	5	5
村 益	1	1
上 荷	25	24
小 計	263	173
残	117	67
内		
問 屋	8	5
満 島 土 場	2	
満 島 仲 士	3	
元 方 見 込	8	6
大 庄 屋	2	2
懸 り 庄 屋	2	2
普 請 引 当	3.5	3.5
潰 地	3.5	3.5
出 役 諸 雑 用	11	11
小 計	43	33
金残=全御益	74	34

乃至一八%とい
うことになる。
一方、御手山運
営に掛わる大庄
屋・庄屋には石
炭百斤につき二
文が支払われる
ことになってい
る。問屋は八文
である。元方も

八文である。また経費に潰地などの補償も計上されていることは、村との約定を実行することが目指されているとみれる。このような諸経費に基づいて出炭価格の算定がなされている。

これらからすると、藩の利益は石炭価格の中に計上されており、価格の一四〇一八%を見込んでいることが窺える。支配人などへの貸付金として、石炭採掘に要する費用を拠出し、それは返済を条件としていたが、その返済が石炭販売代金で賄われるので、その返済金の中に藩の利益が含まれているという仕組である。

藩の取得分をまず確保し、それから諸経費への支出が行われるという仕組を示しているのが、元方へ渡す分の計上の仕方にもみられる。表6がそれである。

表6では、「御益外之分」と上石炭で三二六文とあるのは、表5の「全御益七四文」を四〇〇文から差し引いた額である。ここではまず藩益金が確保されている。中石炭においても同様であり、「御益外之分」二〇六文は、中石炭百

表 6 元方へ渡分算出内訳 (100斤につき)

				上石炭	中石炭
御普掘	益請	外入	分用木	錢326 ^文 3.5 6 56.5	錢206 ^文 3.5 6 30.5
	小計			60	40
	残			266	66
	土御地田村上問	場世方地	料料へ障益荷屋	2 2 1 5 1 25 8 5	2 2 1 5 1 24 5
大掛潰	庄り	屋庄	地	5 2 2 3.5 11	用入屋 2 2 3.5 11
小計				67.5	58.5
元方江金渡				当残198.5	当残 107.5

示されている。

表 6 は、先述のように藩益金を算出した計算に続いて記されたものをまとめたものであるが、上石炭についてみると、百斤の代錢四〇〇文から藩益金七四文を差し引いた額がまず計上され、それから諸費用を除いた残りが元方に渡る分として算出されている。まず普請入用金や柱木金、掘質など採炭に直接かわかる経費が計上され、これら費用を引いた残錢二六六文に対して、土場料、世話料、村益など間接経費六七文半を差し引いた一九八文半が元方に渡る分となっている。

斤の代錢二四〇文から、表 5 の藩益金三四文を差し引いた額である。この場合も、藩益金がまず確保されての計算であることが窺える。

藩益金の算出は、以上のようなのであるが、経営に責任を負う元方の取得分はどのようであろうか。元方分は表 5 では百斤につき、上石炭で八文、中石炭で六文とあった。問屋口錢とほぼ同じ額であり、石炭百斤当り価格に占める比率は二・五—二％程度である。それほど多くは見込まれていない。しかし、実際に元方に渡る金額は直接経費も含まれるので少なくはない。表 6 にそれが

上石炭百斤における元方に渡る額が以上のように計算されているが、藩益金を算出した表5と対比すると、水引、棟梁、勘場、仕繰の直接経費と下し賃が計上されていない。元方に渡る金額であるために直接経費は元方の運用に関するものとして計上されていないとみなされる。元方は渡された金額から直接経費を差し引いた額が利益とみなされる仕組にあるが、この表に関する限り、それがどの程度の利益率になるかは不明である。その点で参考になるのが表5の元方見込とある部分で、これでは上石炭百斤につき八文とある。大庄屋と掛り庄屋の役料が二文なのに對して、経営の責任を負う元方の取分としてはそう多いとはみなされない。

一方、中石炭においては、上石炭の場合とほぼ同じ計算がなされているが、満嶋土場仲仕入用金が計上されていない。満嶋は石炭積出港であるので、中石炭は満嶋まで運送されていない石炭であるため、この経費が出されていないとみれる。中石炭で元方に渡るのは一〇七文半である。

元方は以上のように上石炭で一九八文半、中石炭で一〇七文半渡されるという計算になっている。上石炭百斤の代銀が四〇〇文とあるので四九%が、また中石炭では二四文なので四五%が百斤当り価格の中で元方が受け取る額になる。元方分は藩益金の算出においては二%程度と見込まれていたが、水引、棟梁、勘場、仕繰など直接経費も渡されるので、これら进行操作することによって、見込み以上に利益を出しえる仕組にあったと解される。

以上は石炭百斤についての諸費用及び藩益金と元方受取金に関するものであるが、産出石炭の費用計算においては、種々な様式がみられる。藩益金を計上したもの、掛り役の費用をまず控除したもの、拝借金返済関係などがあり、その都度に応じた算出の仕方がなされている。

(1) 藩益金明示型

石炭販売代金の中から藩益金分を計上した費用算出のものであるが、その例をみると、表7のようである。藩益金は御手山経営にとっては基本的に生み出す必要のものであるが、石炭販売代金における元方の返納金の算出にお

表7 上石炭価格内訳

上石炭	49500斤	内	訳	100斤につき
此代銭	273貫854文			553文2分9厘
内	12貫915文	上	荷 賃 渡	26文9分1毛
残	260貫939文			
内	36貫630文	益	益	74文
	1貫854文	別	米	153文2分4厘
	1貫733文	地	仕	3文
	5貫445文	普	請	3文半
	7貫125文	出	役	15文
	3貫960文	諸	雑	8文
	2貫475文	村	方	5文
		問	屋	
		満	嶋	
		外	仲	
小計	133貫522文			
残	127貫417文			

文半と一致した額になっている。同様のことは問屋口銭でもみられ、八文とそれぞれ計上されている。このように計算した諸経費総額が一三三貫五二二文であり、これを差し引いた残額一二七貫四一七文が返納分となっている。以上は上石炭についての計算であるが、切込石炭に関しても同様のことが行われている。表8のような内容である。

切込石炭は中石炭に相対することは表6との関連で判明するが、この場合の価格は安く百斤につき三三六文余で上

いて、藩益金の確保がなされている。元治元年（一八六四）八月二十九日の「覚」のまとめが表7である。上石炭四万九五〇〇斤が採掘され、その代銭は二七三貫八五四文で、これは石炭百斤当り五五三文二分九厘に相当すると計算されている。この代銭の中から諸費用を差し引いた残りが拝借金に対する返納という仕組になっているが、それを見ると、まず上荷賃として一二貫九一五文が計上されている。これは百斤につき二六文九分一毛であるが、表5においての上荷賃が二四〇二五文であったのに相応している。この上荷賃を差し引いた残銭を出し、それから諸経費を更に引くという仕組である。「益」として三六貫六三〇文が出ているが、これは百斤につき七四文であり、それは表5の「全御益七四文」とあるのと同じになっている。表5の価格内訳が基準になり運用されている様式である。これは潰地仕付米・普請引当費が百斤につき三文半とあるが、これも表5の三

表 8 切込石炭価格内訳

切込石炭	683500斤	内 訳	100斤につき
此代銭	1613貫900文		236文1分2厘8毛
内	172貫680文	上 荷 賃 渡	25文2分6厘4毛
残	1441貫220文		
内	230貫390文	益 付 米	34文
	20貫923文	漬地仕引 普請役其外諸費	3文半
	75貫185文	出引	3文半
	102貫525文		
	34貫175文	問 屋 口 銭	5文
小計	468貫198文		
残	973貫 22文	返 納 分	142文3分5厘8毛

石炭の半分程度である。しかし、出炭額は上石炭の一四倍ほどなので、この切込石炭が主である。諸経費に関する内訳の計上は上石炭と同じである。百斤当りの価格も変わらないのが多いが、益銭は三四文と中石炭の益銭が計上され、また「問屋口銭」も五文とこれまた表5のそれと同額である。それゆえに、切込石炭の場合も百斤についての中石炭諸経費

を基準にして諸費用の計算がなされていることが窺える。このような費用算定によつて藩は上石炭で錢三十六貫六三〇文、切込石炭で二三〇貫三九〇文を取得する形態になっている。この計算では、まず上荷賃が計上され、ついで益金が出されている。諸経費内訳では、表5にあるような元方、大庄屋、懸り庄屋への手当金などは計上されていない。何故かはこの限りでは不明であるが、石炭価格内訳を計上する場合ごとに、これらの経費が出されているとは限らないようである。表9にそれが見られる。

表 9 各支皮内訳

		内 訳	100斤につき
石 炭	733000斤	8 月中売渡高・村方渡	
此 銭	109貫950文		
内訳	14貫660文	大庄屋へ思召被下	2文
	14貫660文	掛り庄屋へ思召被下	2文
	7貫330文	村 益	1文
	7貫330文	地 質	1文
	36貫650文	田 地 障	5文
	14貫660文	土 場 賃	2文
	14貫660文	世 話 料	2文

(四) 役料表示型

元治元年（一八六四）九月二十九日に石炭賣渡高についての届けがあるので、それを見ると八月中に売渡したのは七万三千斤となっている。表9のような内容である。銭にして一〇九貫九五〇匁であるが、これが次のように配分されている。大庄屋と石炭掛り庄屋にそれぞれ一四貫六六〇文で、これで総銭高の一五%づつになる。一方、一番多いのは田地障りであり三六貫六五〇文で、これは総銭高の三〇%である。補償費のウェイトが高いことがここにみられる。石炭百斤につき五文というのが高い。採炭に伴う被害や田地の潰地化が大きな問題であったことが窺われる。これは採炭に際しては、御手山制をとるにせよ、鉾害補償が必要であったことの反映であり、過去の採炭で苦しめられた住民の対応の厳しさを示すものとして受け取れよう。採炭によって村が潤う度合は、それほど高くない。村益金は銭七貫三三〇文であり、全銭高の六%程度で、採炭高で賄われる村への益金は余り期待できる額ではない。世話料に一四貫六六〇文なので、むしろ、採炭関係者への潤いが比較上では多くなる内容である。

表9からすると、藩益金の計上がないが、大庄屋、掛庄屋への手当が計上されており、表8と異なった内容になっている。それゆえに、石炭販賣では定まった経費計算が行われるのではなくて、その時の必要に応じた計算がなされる形態にある。石炭販賣代金の中で必要経費の中に大庄屋・庄屋の役料が確保されているのが窺える。

表10は掛り庄屋の役料がまず差し引かれた勘定の例である。

慶応元年（一八六五）六月から十二月までの天徳御手山の石炭採掘は一万二八五斤であり、この代金は銭一〇三貫五一文である。この代銭の中から、まず掛り役料として五貫八〇六文が差し引かれている。役料は石炭百斤につき二文である。この役料を引いた残銭九七貫二四五文に対して、大庄屋役料、土場料、地質、田地障りなどの諸費用が計上されている。ここでは大庄屋の役料も計上されている。これら諸費用の百斤当り金額は表5によるものとほぼ一致しており、経費算出においては表5の基準がもとになっている。

ができるであろう。

表10 天徳御手石炭惣勘定（慶応元年6月～12月）

銭 額	内 訳	石炭100斤につき
銭 103貫 51文	石炭 190285斤代銭	(541文)
内 5貫806文	掛り役料	2文
残 97貫245文		
内 5貫806文	大庄屋役料	2文
4貫354文	土場道下弁	1文
5貫806文	土 場 料	2文
14貫514文	村 益	5文
34貫834文	地 質	12文
23貫223文	田 地 障	8文
8貫709文	元方益之内地質	3文
小計 97貫246文		
七二銭 1貫350匁6分4厘		
内 18貫386文	12月27日勘定	
68貫625文	同 上	
144文	先勘定済分	
87貫155文		
七二銭 1貫210匁4分5厘		
残 140匁1分5厘		

以上のように、勘定においては、その勘定目的によつて構成の内容が異なっているが、表10の勘定で注目されるのは、銭額表示において七二銭表示がなされていることである。七二銭は銭七二文を一貫とするものであるが、銭一貫文を基準にしてでなく、七二銭で表示されていることは、銭勘定においては、社会的価値として七二銭がこの地域でも計算されていたことを示すものであり、惣勘定においては、七二銭で検討することが欠かせないことを示すものであろう。³⁾それだけに、石炭代金の勘定が現実的重みをもつて行われていたと受けとれるものがある。金銀勘定でなく銭勘定であるところに、一つの特徴を見ることが

(1) 棟染、掛り庄屋、村益、地質などの金額は、この地域の相場のようなのであるが、掘賃、水引賃などは高い。『相知町史』下巻五五九一六〇頁参照。

(2) 前掲町史にある勘定では、藩益金は百文のうち生石炭で九文、焼石炭で一四文となっており、益金率は九%から一四%である。同書五五九一六〇頁。

(3) 藤本隆士「近世における銭貨流通の一考察―福岡藩の「匁銭」成立を求めて―」『経済学研究』四巻四・五・六合併号、一

九八四年）、同「秋月藩の匁銭と札一硬貨と札と価値と」（『商学論叢』二九卷二、三合併号、一九八四年）、七二銭で勘定が行われていることは、文中の拝借金証文においてもみられるが、左にも一例を示しておこう。

拝借金証文之度

十日御正月十九日を讀下り分

一切込石式拾九万式千五百斤

右同部主地

一同五拾四万斤

八拾三万式千五百斤

此銭千六拾壹貫四百三拾八文

七二〆拾四貫七百四拾式匁分九厘

拾三貫目 拾貫目御 前拝借奉願

右者当十月朔日方昨十九日迄土場出石之分代銭之内、前拝借被仰付難有儲ニ請取申上、然ル上者来ル十一月十九日石炭

代御勘定御引取返上納可仕、若不足仕ハ、別段返上納可仕、為後日拝借證文仍如件

元治元子十月十九日

定 吉

松本治右衛門

吉井 定 治

向 郁 治

地方

御役所

六 拝借金の増加

十二月十二日に出炭高について書き出されている。総出炭高は二九〇万斤であるが、その内訳は表11のようであ

表11 出炭高内訳

	出炭高	
1. 切込石炭	30万斤程	11月朔日より高
1. 同	170万斤程	以来積下あり
1. 同	90万斤程	只今土場下有石

地方

御役所

とある。諸入用費用としての借用の申し出である。返済には出炭代金で支払うとある。これよりすると、採炭に伴う諸経費については、基本的には藩の賃金で賄うことになる。掛り役を一方的に命じられ、御手山運営の任を負わされたことからすると、運営に必要な資金は藩側が調達すべきであるという認識になろう。支配人は経営上の責任は持たされるが、資金面については、藩側に依存するという形態にある。この点において、御手山制の特徴があると指摘することができるであらう。

る。十一月一日からの積下し高は三〇万斤ほどであるが、この外に二六〇万斤ほどが掘り出されている。出炭自体はかなり順調に進展していることが窺えるが、必ずしも持続的でない。御手山支配というこのために、石炭採掘に係わる経費については、藩側に度々借用を申し出ているが、十二月十一日には米八〇俵、七二銭三三貫の借用を願い出ている。

以書付奉願ひ

御手石炭支配人

定吉

一御手形八拾俵

一七式銭三拾貳貫目

右者石炭山諸入用為取済前拝借奉願ひ、願之通被仰付被下置いハ、難有仕合奉存い、尤返上納之義 別紙書上之出石代ヲ以来三月限り返上納可仕い、万一不足仕いハ、別段返上納可仕い、此段以書付奉願ひ 以上

十二月十一日

掛

向 郁二

慶応元年（一八六五）八月に、これまで採炭していたのと別に新しい場所が御手山に指定されるようになった。
天徳山という所であり、その支配人に向定吉を命じている。

申 渡

相知村

向 定吉

其方義与十郎願濟之天徳山此度御手山被仰付ニ付、右支配人申付ハ間丹精可有之ハ、此段申渡ハ 以上
とある。御手山がもう一か所増やされたことが窺われる。

このような状況にあつて、藩への借用願いは続けられている。八月十三日には、上荷船建造用金として金三十両
の借用を願ひ出ている。

拝借証文之事

一金三拾両

御手石炭山支配人

定 吉

右之通石炭上荷船五艘新規打建仕ニ付、右入用元木并木挽賃拝借金御渡被下置難有慥ニ受取申上ハ、然ル上者来ル
卯冬迄月々無滞返上可仕ハ、為後日拝借証文仍如件

慶応元年

丑八月十三日

支配人

定 吉

問屋

松本儀左衛門

同

吉井 定 治

掛り役

向 郁 治

と金三十両が上荷船建造用に貸し渡されている。この証文から上荷船調達まで支配人が責任を負っていることが判
明するし、また、問屋とも密接な関連を保っていることが窺える。拝借金の動向をみるために、御手山の出産量に

ついて、少し検討しておこう。

岩屋御手山で採炭され引き渡された量をみると表12のようである。元治元年（一八六四）八月の分は、これ以前に出炭された量も含まれているゆえに多いが、九月分は二七万五五〇〇斤とある。翌十月は四五万一一〇〇斤になり出炭も増えるが、十一月には二五万五五〇〇斤となり、再び二五万斤台になっているので、出炭が安定的でない。しかし、慶応元年（一八六五）になると次第に出炭も増えてきている。同年一月分は四二万八〇〇〇斤であり、翌二月も四六万七〇〇〇斤なので、ほぼ四〇万斤台の出炭が確保できるようになっている。そして四月には五二万七五〇〇斤と五〇万斤台に達し、五月には七五万六〇〇〇斤となり、元治元年九月分の二・七倍に及んでいる。出炭規模が大きくなっている。この頃は出炭条件も整ったようで、その後五、六、七月は六〇万斤台を保持している。この三か月が順調だったようで、八月には五二万二〇〇〇斤と五〇万斤台に落ち、十月には四二万五〇〇〇斤となり次第に低下している。慶応二年（一八六六）では一月には三八万斤台で採炭量が増え、二、三月は五〇万斤台に近づき、四月には八七万九五〇〇斤と、これまででは最も多い出荷高になっている。五月には三〇万九〇〇〇斤と三〇万斤台に落ち込むが、翌六月には五七万五〇〇〇斤と再び五〇万斤台に達し出炭高が増えている。このように、出炭高は慶応二年でもそれほど落ち込んでおらず、四月にはこれまでの最高の出炭高になっているので、出炭趨勢はほぼ維持されていたとみなされる。一方、天徳御手山での出炭高は表12のように、それほど多くはない。慶応元年（一八六五）六、七月が一五万八〇〇〇斤、八月が六万七〇〇〇斤、九、十月が六万一二八五斤なので、ほぼ一か月が四、六万斤台であり、岩屋御手山の十分の一度程度である。御手山の主体は依然として岩屋にあった。新御手山はそれほど有用でないといなされる。

御手山制による石炭採掘において、支配人による経営は賃金面で色々と問題をもっていた。人足賃、資材費などの出費が少くないゆえに、その調達については勢いに依存せざるをえなかった。慶応二年（一八六六）六月に

表12 炭屋・天徳御手山出炭高

炭屋御手山出炭高			天徳御手山出炭高
元治元年(1864)	8月迄	733000斤	
	9月分	275500	
	10月分	451100	
	11月分	255500	
	12月分	351000	
慶応元年(1865)	1月分	428000	158000斤
	2月分	467000	
	3月分	527500	
	4月分	756000	
	5月分	691500	
	閏5月分	658000	
	6月分	626000	
	7月分	522000	
	8月分	487000	
	9月分	425600	
慶応2年(1866)	10月分	192500	61285斤
	11月分	155000	
	12月分	384000	
	1月分	499500	
	2月分	491500	
	3月分	879500	
	4月分	309000	
	5月分	570500	
	6月分	261500	
	7月分	477500	
	8月分		4000斤

七二銭百貫目の借用を申し出ているが、その文面には資金調達上の問題が明示されている。以下のような内容である。

以書附奉歎願い事

御手石炭山支配人
相知村 向 定吉

一七二銭百貫目

右者 以御恩沢御手石

炭山支配人被仰付難有

仕合奉存、是迄取續罷

在申い処、近来米穀者

勿論諸色共殊之外高直

罷成行届兼申い二付、

去冬御歎申上い処、格別之御慈悲を以拝借被仰付難有奉存い、未タ返上納錢^茂御座い中又、御難申上い段当人^者勿論於私共^{ニ茂}奉恐入い得共、当年^ニ罷成い処、米穀諸色共無類之高色^ニ罷成、何分取續相成兼当惑至極奉存申上い^{ニ付}、書面之通拝借奉願上い、以御勘弁拝借被仰付被下置いハ、当拝借御引直被下置い様奉願上い、尚又糧米之儀余程心配仕い^{而モ}買入出来不仕い^{ニ付}、御手形百俵高拝借奉願い、彼是申上い段重、奉恐入い得共、御形代之義

只以拝借之内より御引取被成下置い様奉願上い、御時勢柄莫太之拝借等御歎申上い段実以奉恐入い得共、何分取續方之手段無御座不止得事不顧恐奉歎願い、左^茂御座いハ、出石方如何様精心を盡返上納相濟い迄者御歎等申上間敷段一向歎出申いニ付、出格之御憐愍を以書面之通拝借被仰付被下置いハ、当人者勿論於私共ニ^茂重疊難有仕合奉存い、此以書付奉歎願い 以上

寅六月廿一日

松本源助

吉井定治

向 郁治

田崎九郎

地方

御役所

七二錢百貫の借用を申し出たものであるが、米穀の高騰によつて経営が困難になつてゐることが書き上げられてゐる。米の買入れができず藩米百俵の調達を願ひ、この代金は拝借金の中から差し引くことを求めている。米価高騰の影響が大きいことが窺われる。石炭価格の騰貴が伴わない限り経営は困難にならざるをえない状況にあつた。これは同年八月にも借用を申し出ていることにも現われている。

拝借証文之事

相知村
御手石炭山元方

向 定吉

一金五百七拾八兩三分貳朱 錢三十壹文

右之通御手石炭山諸入用仕入金拝借奉願御貸渡被下置難有慥ニ受取申上い、然ル上者返上納之分当八月より九月

中出石上石百斤ニ付百文、中石百斤ニ付三十文御引取被下置御勘定済之上拝借御願申上様可仕、万一返納方相滞^者以節^者当大庄屋并問屋^ニ而吃度取計御返納可仕、為後日拝借証文仍而如件

慶応二寅八月廿七日

石炭問屋

松本源助

同

吉井定治

懸り

向 郁治

相知村大庄屋

田崎九郎

地方

御役所

金五七八兩余の借入を願ひ出ている。御手山石炭諸入用のためとしている。この返済のためには、八月から九月の石炭で支払い、それは上石炭百斤で百文、中石炭百斤で三十文の割合で行いたいとしている。莫大な金額の借用願ひであるが、これほどの費用を要するのは、採炭規模の拡大と経費調達の不十分さに由来するものとみれる。借用人は御手山支配人の向定吉であるが、その保証には問屋の松本源助と吉井定治の二人が、また掛り役の向郁治と相知村大庄屋の田崎九郎が行なっている。支配人向定吉の資金調達がこれらの者にとつても肝要であつたことを示している。

このような借用願ひは、慶応二年（一八六六）十二月二十一日にも出されている。

以書附奉歎願事

一七二錢九拾五貫目

右^者以御恩沢御手石炭山支配人被仰付難有仕合奉存取續罷在申^イ処、近来相續米価之義^者勿論彼は殊之外高直

ニ罷成、諸仕入行届不申、去冬御歎申上莫太之拝借被仰付難有奉存ハ処、未タ返上納残茂莫太御座ハ中又ハ当春以来茂段々御願申上未タ余計納残御座ハ中、奉恐入ハ得共、当年ハ別而未聞之世上柄ニ罷成何分取續相成兼奉困り入ハニ付、此上別段之思召を以右高拝借被仰付被下置ハハ、是迄納残之分右内方御引取被下置、尚残之分来四月方上石百斤ニ付百文、中石百斤ニ付三拾文ヲ返上仕ハ様被仰付下置ハハ、難在仕合奉存ハ、左御座ハ而若不足仕ハ分者別段調金仕来卯十一月吃度皆納可仕ハ、御時節柄莫太之拝借奉願ハ義恐至極奉存ハ得共、何分取續相成兼ハニ付、不得止事奉歎願ハ、至極之御勘弁を以書面之通拝借被仰付被下置ハハ、当人者勿論於私共ニ茂重畳之難在仕合奉存ハ、此段以書付奉歎願ハ 以上

寅十二月廿一日

水主町問屋

松本源助

同町

吉井定治

掛り大庄屋

向 郁治

相知村大庄屋

田崎九郎

地方

御役所

七二銭九五貫目の借用願いである。六月二十一日にも七二銭百貫目、八月二十七日には金五七八両余の借用を願ひ出ていた。これらがすべて返済されず多く残っていたことは「返済残茂莫太御座ハ」とあることから明らかであり、この状況において、更に多額の借用願いをしているのは、経営困難の現われを示すものである。これが物価騰貴などの要因による所が多いことは「未聞之世上柄」としていることから明らかである。慶応二年という世直し運動激化に伴う世上不安定が大きく影響している。度び重なる多額の借金申し入れは、御手山の経営が行き詰まりをみせていることを反映したものであり、これは藩にとっても、経営資金の貸与などによって、多額の支出を余

儀なくされ、利益をえるよりもむしろ出費を重ねるものとなってきたことでもあつた。この間の事情は御手山石炭山元方の歎願書に明瞭に述べられている。

以書付奉歎願事

一七二錢拾實目

梶山村
御手山石炭山元方
太吉

右者 去年来莫太拝借被仰付御手山石炭山出石段、心配仕ひ得共、春以来仕操續而半過之処、出石相成不申、其上石炭不景氣ニ罷在、米価諸色未聞之高直ニ罷成ひ、就而ハ日、取續相成兼是迄拝借返納之義無廻等閉ニ罷成御恩澤忘却仕ひ様罷成重畳奉恐入ひ処、漸当秋ニ至宜敷場所ニ掘付、只今上石五万斤程^茂出石仕居ひニ付、来春^者余計之出石仕ひ見込ニ御座ひニ付、此上出格之以御勘弁是迄拝借分返納不足之分御引取之外ニ右錢高当冬御貸渡被下置ひハ、重畳難在仕合奉存ひ、御返上之義ハ来二月方出石下高月、返納仕相済ひ迄^者別段拝借御願不申ひ様可仕奉存ひニ付、何分以御憐愍右高拝借被仰付被下置ひ様奉歎上ひ、此段以書付奉歎願ひ

寅十二月

以上
問屋

松本源助

同

吉井定治

懸り役

向郁治

地方

御役所

出石が順調に進まず、石炭価格は上昇しないのに諸物価は高騰し、それがために経営が困難になつていと述べている。出炭があまりよくなり、経営上でも問題があることが示されている。それゆえに、これまでの拝借金の外に七二錢一〇實目の借用を申し出ている。これら一連の拝借金願いからして、御手山による経営が困難になつてい

ることが窺える。出炭不調のそこへ米価高騰による影響が出ている。² 慶応二年（一八六六）の米穀騰貴は世直し状況の高揚をなす原因でもあったが、石炭経営にも大きく作用していることが出ている。米価騰貴による経営悪化は、御手山制の存続にもかかわる問題を含んでいたとみなされる。元方や支配人による度重なる拝借金の願い出は、経営の逼迫を示すものであり、それだけに、藩にとって御手山は支出の多いものとなり、当初の予測とは異なつて、御手山は利益をもたらすのではなくて、逆に出費を重ねるものとなつてきた。御手山制を施くこと自体が問題になる事態となり、物価変動による影響も大きいだけに、藩の手立のみでは対処できないことであつた。御手山に関する資料が慶応二年で終つてゐることは、それが持続されなかつたためと思われる。

（1） 天徳山は岩屋口の近くに位置していた。祭城一子「かつての炭坑所在地（相知町）」（『エネルギー史研究——石炭を中心として——』一一号、一九八一年）。

（2） 山崎隆三『近世物価史研究』（塙書房、一九八三年）第三章第二節参照。

七 むすびにかえて

唐津藩の石炭御手山について検討してきたが、御手山指定が村方の意向を汲み入れることで施行されたことは、藩権力の一方的指定では措置できないことを意味している。藩の排他的で絶対的な土地支配という体制にない。御手山制施行のために大庄屋と庄屋に村方説得を命じているが、これは村請制村落における村役人の行政的側面の活用であり、村方の意向を汲み取るにおいて、村役人の存在が欠かせないことを示している。

御手山の経営形態においては、掛りの藩士を石炭山に派遣し監督する体制をとっているが、経営の主体は石炭稼業人の支配人及び元方であつた。採炭などの仕事を担当しているが、その経営資金は藩の拠出金によつていた。拝

借金という形態で資金を借りうけ、石炭販売代金で返済するという仕組がとられている。藩は経営資金を支出するが、それは元方への貸付金という形態がとられている。これからすると支配人や元方は経営請負的な存在である。この点を明示しているのが、石炭価格における諸費用の計上内容である。藩益金と元方受取金とが算定されているが、藩は益金を石炭価格の中に計上させて利益を確保する仕組がとられている。請山制による運上金乃至冥加金の徴収とは明らかに異なる形態であり、御手山制の特徴がここに出ている。元方取分も計上されている。大庄屋と庄屋の役料、村への支払い金なども計上されていることは、御手山制における係わりを示しており、元方、大庄屋、庄屋の関与なしには運用できないことを反映している。一方、水夫、棟梁、勘場、土場、問屋などに係わる費用も計上されていることは、価格形成の要因を諸経費の総合として認識するようになっていたのを明示しており、価格概念が費用價格の側面で把握しうる可能性をもつまになっているとみられ、そこに価値認識の進展があると指摘できる内容がある。

御手山経営も慶応期の物価上昇なく米価騰貴によって大きく影響を受けて経営が困難になっている。拝借金 の度重なる願い出がそれを反映しており、藩にとっては支出の多い事態となっていた。御手山経営が外的要因によって困難になっている。慶応期の変動はかくして唐津藩においても大きく影響を与えているとみなすことができる。石炭需要の高まりに対応したとされた御手山経営も、運営の実態が元方に依存することであったため、藩の思惑く通りに進展せず、出金のみ多いという状態にあった。藩営という問題の一端を示しており、単に藩士の輪番的管理では事を処しえないのが明確になっていた。御手山経営によって、新しい事態に対応しようとした唐津藩の意図は貫徹できていない。